

診療科目 ● **病理学**

プログラム責任者：大橋 健一

附属病院	病理診断科・病理部
教授	大橋 健一（病理診断科・病理部部长）
准教授	山中 正二
助教	日比谷 孝志、三宅 暁史
附属市民総合医療センター	病理診断科・病理部
教授	稲山 嘉明（病理診断科・病理部部长）
准教授	大谷 方子
助教	千葉 佐和子、田辺 美樹子
医学部	病態病理学
教授	大橋 健一
講師	奥寺 康司
助教	立石 陽子、梅田 茂明
医学部	分子病理学
教授	青木 一郎
准教授	古屋 充子
助教	加藤 生真

本プログラムの特徴

臨床医学としての病理学は、①病理解剖、②組織診断、③細胞診を3つの柱とします。
 下記の一般目標ならびに到達目標を達成することを通じ、病理専門医に求められる知識・技能の基盤を構築します。関連各科と協力しながら、患者さんのためになる医療を実践できる病理診断能力の養成に努めるとともに、日常病理業務の中から生じる科学的疑問に対して自ら対処できる研究能力も培うことを目的とします。
 病理学は、専門分化の著しい臨床各科とは好対照に、あらゆる臓器・疾患に対応しなければなりません。幅広く疾患を経験する中で、自分の専門分野を見出し掘り下げて、その後の病理アドバンスプログラムにおいて、病理学に根ざした研究や学位取得を目指して行ける病理研究者としての素養を身につけられるよう指導します。
 以上のために、上記4部門が一体となって指導するとともに、記載の協力病院やその他の関連病院病理部門と密に連携していきます。なお、実際の研修方法については、各人の希望を取り入れながら、フレキシブルに対応します。

目 標

- ★**専門医取得のための一般目標として、**
- ①病理解剖を自ら執刀し、病理所見をまとめ、臨床上の問題点に答え、第3者に説明することができること
 - ②代表的疾患の手術標本につき肉眼所見をとり、切り出しを行い、生検標本を含め自ら診断することができること
 - ③代表的疾患の細胞診標本につき、自ら診断することができること
 - ④病理学的な種々の検査法・診断法を理解し、自ら実践することができること
 - ⑤カンファレンスや学会発表等を通じ、臨床医学における病理学の意義や重要性を理解すること
 - ⑥疾患のメカニズムや新規診断・治療法などを探究するための基礎的素養を磨くこと
- ★**そのための到達目標として、**
- ①専門医取得のために、3年間で、いずれも著しく偏らない症例につき、下記を経験すること
 - 1) 病理解剖執刀 30 例
 - 2) 生検・手術標本 4,000 例（迅速診断 40 例を含む）
 - 3) 細胞診 3,000 例
 - ②学会等で発表を自ら行うとともに、病理学に関する論文を執筆すること

目標とする学会認定専門資格

日本病理学会病理専門医	①会員歴3年以上、②死体解剖資格を取得していること、③4年以上人体病理学を実践した経験をもつこと：病理解剖40例以上、外科病理5000例以上（迅速診断50例含む）等
日本臨床細胞学会細胞診専門医	①会員歴3年以上、②5年間以上にわたり細胞診断学の研修を受けた者、③関連論文3編以上をもち、その内1編は筆頭者、など

主な協力病院

横浜市民病院、県立がんセンター、県立こども医療センター、横浜医療センター、横浜市南部病院、横浜南共済病院、横須賀共済病院、横浜栄共済病院、国際医療福祉大学熱海病院、藤沢湘南台病院、茅ヶ崎市立病院、県立循環器呼吸器病センター、平塚共済病院、県立足柄上病院、横浜保土ヶ谷中央病院、湘南記念病院、藤沢市民病院など

診療科のホームページ URL

担当者・連絡先

附属病院病理診断科 http://www-user.yokohama-cu.ac.jp/~hamapath/ センター病院病理部 http://www-user.yokohama-cu.ac.jp/~urabyou/index.htm 病態病理学 http://www-user.yokohama-cu.ac.jp/~pathola/index.html 分子病理学 http://www-user.yokohama-cu.ac.jp/~byori2/index.html	大橋 健一 ohashi@yokohama-cu.ac.jp
--	-----------------------------------

診療科の実績

附属病院 平成26年実績：	病理解剖：43例	組織診断：10,436件	細胞診：9,993件
センター病院 平成26年実績：	病理解剖：30例	組織診断：11,236件	細胞診：8,876件

指導医から一言

医学生、若手医師の多くは「病理は基礎医学」というイメージをお持ちだと思います。でも、病院病理部門としての病理学は「臨床医学」そのものです。
 患者さんから採取した組織や細胞を形態学的にあるいは分子生物学的手法も駆使して「診断」する。手術範囲を最終的に決定したり縮小手術を行うには術中迅速診断が不可欠ですが、常勤病理医がいなければ行えません。治療効果の判定や予後予測する上でも病理診断はなくてはなりません。最近では、ホルモン療法や分子標的療法を行うために、免疫染色や遺伝子学的検索が不可欠になってきており、治療選択に直結します。このように、診断病理学はまさしく臨床医学に属します。
 横浜市大2病院における病理診断科・病理部は、院内で採取されたすべての臓器・疾患を取り扱います。そしてオールラウンドに活躍できる病理専門医の育成に力をいれています。
 その一方で、病理学講座と常に連携しながら業務をおこなっていますので、レジデントプログラムの途中で大学院に進むことも可能です。診断部門のみならず研究部門など活躍する場が多様であることも病理の魅力といえましょう。
 また、関連病院とは定期的なカンファレンスを行うなど、横浜の病理全体として切磋琢磨しています。
 病理は、当直がないなど忙しい中でも比較的自分のペースで仕事ができるので、家事や育児との両立も真剣に考えていかねばならない女医さんにはうってつけの職場。実際、育児に奮闘中でありながら、専門医資格も取って、仕事に育児にバリバリの若い女性病理医も多数活躍しています。
 男女を問わず、やる気のある若人をお待ちしています。
 絶滅危惧種と言われる病理ですが、最近では少しずつ関心を寄せてくれる人が増えてきています。平成27年4月現在、大学病院、関連病院に3名のシニアレジデントが在籍しています。

シニアレジデントからのメッセージ

病理部後期研修医2年目となり、現在は市中病院で病理診断の研鑽を積む日々を送っています。1年目は大学で研修をしましたが、学生及び初期研修の頃に病理に触れていたとはいっても、後期研修医になった時点でほとんど病理診断の基礎ができていない状態でした。それでも指導医の先生方が根気よく付き合ってください、充実した日々を過ごしました。大学は30代以下の若手の先生が多く相談しやすい雰囲気があり、また臨床科にいた先生もいるため臨床に則した話が聞けるのも特徴です。他大学出身者も多いため、出身大学に関係なく仕事ができます。臨床科とカンファレンスや解剖のカンファ、CPCといった勉強になる機会が多いのも特徴です。学会報告の機会も多く、関連機関に県立がんセンターや子供医療センターがあり専門的な勉強の機会も充実しています。市中病院でコモンな疾患の訓練もできます。それぞれの人に合わせた方法でスキルを身につけられるところだと思います。（平成24年卒、済生会横浜市南部病院レジデント 片岡俊朗）

縁もゆかりもない横浜にやってきて病理医になりました。わたしは高知生まれ高知育ち、大学も初期研修も高知大学と、純粋高知培養の人間でした。この春から家庭の事情で横浜に引っ越すこととなり、横浜市立大学病理部の門を叩きました。学生の頃はひたすら遊び、6年生の頃に病理医を志すようになりましたが、初期研修では臨床にばかりうつつを抜かし、病理に関しては学生レベルだったと思います。そんな私ですが、優しい指導医の先生方や、頼れるシニアの先輩方のおかげで、日々勉強させて頂き、新米シニアレジデントとして充実した毎日を過ごしています。母校でないという不安もありましたが、先生方、技師さん達も温かく迎えてくださり、そんな不安は働き出してすぐに吹き飛びました。横市出身の方も、そうでない方も、働きやすい職場だということはわたしが保証します！また、センター病院や関連病院のシニアとも交流があり、こちらに来て若手が多いことにも驚きました。そこも横市病理の魅力の一つだと思います。（平成22年卒、センター病院指導診療医、筒井美帆）